健康文化　13 号
1995 年 10 月発行

巻頭言

戦後半世紀をかえりみて

玉木　正男

「健康文化」が多くの皆様から健康と文化に関連した貴重なご寄稿を得て、創刊から早くも今年で５年を経過した。

今年は、第二次大戦の終戦を迎えてから 50 年であり、またＸ線発見から 100 周年であることは、特に放射線医学にたずさわる私どもにとっては感銘深いものがある。

一世紀前のＸ線発見が文字通り画期的な科学の発展であったことは言うまでもないが、その一応用面である医学医療だけに関連しても Keine Medizin ohne Röntgen（レントゲン無きところに医学なし）と言われる新時代の幕開けをなすものであった。Ｘ線が人体の健康維持に果たした大きい役割については多言を要しないであろう。

第二次大戦終戦からの半世紀をかえりみると、悲惨な終戦前後を知る我々の世代の者から見て全く奇跡とも言える発展を日本の社会が成し遂げたのはどうして可能だったか。それにはもとより多くの要因が考えられようが、わが国における普及度世界一の初等教育に始まる熱心な教育とそれに深い関係を持つ高い文化意識とが生んだ成果であったと言えるのではなかろうか。

「健康文化」の尚一層の発展を期待して筆を置くことにしたい。

（1995 年 8 月）

（大阪市立大学名誉教授）